

OMEPアジア・太平洋地域大会(APRC)2019における研究発表記録

大庭 三枝⁽¹⁾, 弘田 陽介⁽¹⁾, 春木 憂⁽¹⁾, 森 美智代⁽¹⁾

本稿は、OMEP（世界幼児教育・保育機構）アジア・太平洋大会（APRC：Asia Pacific Regional Conference）2019における本学からの3件の研究発表について、幼児教育・保育研究の世界的動向の中での検討を試みるものである。OMEPは、全ての就学前の子どものために国境を越えて協力する目的で1948年に創設された国際機関であり、京都で行われたAPRC2019において、本学からは幼児教育における日本的な「自然」概念を検討した研究、接続期の課題を追究した研究、ESD教材を活用した保育者養成に関する研究が発表された。大戦の反省から異なる価値観と技能を分かち合う目的で設立されたOMEPのAPRCで、異文化の接する所として「自然」概念を軸に幼児教育が検討され、さらにESDを展開する教材と保育者の養成に関して国内外で共有できる内容が発表された。加えてOECDからも問題提起された接続期の課題についても検討され、いずれも国際的な広がりの中に位置づく多様な観点からの幼児教育・保育研究が発信された。

キーワード：OMEP（世界幼児教育・保育機構）、アジア・太平洋地域大会（APRC）、自然、接続期、ESD

はじめに

2000年以降、OECDの比較調査報告書（Starting Strong: Early Childhood Education and Care, 2001）などが刊行され、乳幼児期の発達が人間発達の基礎を形成するものとしてその重要性が指摘されている。子どもを取り巻く社会的な状況を整備し、子どものウェルビーイングを幼児教育・保育の中核に置くことを政策課題として提案して以来、Starting Strong IIⁱ（2006）、IIIⁱⁱ（2011）、IVⁱⁱⁱ（2015）、V^{iv}（Starting Strong 2017^vと同時）、Engaging Young Children^{vi}（2018）と、幼児教育・保育に関する様々な観点から子どもを取り巻く環境の質向上を目指した比較調査報告と提言が次々となされている。

国際的には教育の方向性として、国連が2005年から2014年までを「ESD（Education for Sustainable Development；持続可能な開発のための教育）の10年^{vii}」と定め、ユネスコがESDを主導する機関としての役割を担ってきた。環境、貧困、人権、平和、開発と現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、持続可能な社会を創造していく担い手を育む教育が推進されている。

2015年9月には、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓って、持続可能な世界を実現するための17のゴール（貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、衛生、エネルギー、環境、平和など）と169のターゲットから構成される持続可能な開発目標（SDGs）^{viii}が、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた。

こうした世界的な潮流の中で、UNESCO（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization：国連教育科学文化機関、1946年創設）と連携して、乳幼児期のニーズに応え就学前の子どもの教育や保育のために国相互の平和的な協力と理解を目指す国際組織として1948年に結成されたOMEP^{ix}（Organisation Mondiale pour l'Education Pré-scolaire；世界幼児教育・保育機構）のアジア・太平洋地域大会（Asia Pacific Regional Conference：APRC）が2019年9月に京都で開催され、福山市立大

⁽¹⁾福山市立大学教育学部児童教育学科

学からも3件の研究発表(英語)がなされた。

本稿では、OMEPの歴史的経緯と日本委員会の活動を概観したうえで、OMEPアジア・太平洋地域大会における福山市立大学からの研究発表について、幼児教育・保育研究の潮流における位置づけを検討する(執筆担当:大庭)。各研究の過程および発表の概要については、弘田、春木・森、大庭が、それぞれ執筆した。

1. OMEPについて

1-1 創設前後の歴史的背景^x

OMEPの設立は、ヨーロッパ大陸だけで130万人を超える孤児が出たといわれる第二次世界大戦終了直後より構想された。その中心的人物であったアレン卿夫人(Lady Allen of Hurtwood)(イギリス保育学校協会(British Nursery School Association)会長)は、創設されたUNESCOの活動領域に就学前の子どもたちが含まれていないと考え、ストックホルムのミュルダール(Alve Myrdal)夫人(社会教育教員養成大学(Social Pedagogical training College)学長)の協力を得ながらUNESCO関係者へ働きかけて、幼児に関する国際組織の結成に向けて精力的に活動した。彼らは幼児教育の諸問題を扱う会議や組織を後援すべき存在としてUNESCOをとらえており、UNESCOとの連携の中で幼児教育の国際組織が世界平和と安全のためにいかに貢献できるか模索し、ついに1948年プラハでのUNESCO主催セミナーの後に第1回世界大会を開催、幼児教育の国際組織として承認されOMEP結成が決議されたのである。

以降UNESCOは、幼児教育のために国際的に働くNGOとしてOMEPを評価し、緊密な協力関係を続けている。

プラハで開催された第1回世界大会(テーマ「The childhood and the World Community(子ども時代と世界共同体)」,17か国の代表が参加)に続き、第2回パリ(1949)、第3回ウィーン(1950)の世界大会でも、幼児の発達ニーズに応える必要性を各国政府や国際機関に訴えてきた。1950年代に入ると世界大会は隔年開催となったが、世界の子どもたちの発達や教育に関する情報を発信し、各国の幼児教育関係者が協力する姿勢は継続された。創成期においては、情報発信のための機関誌や組織運営に対し、UNESCOからの特別基金が大きな援助となった。

1-2 世界五地域における活動^{xi}

1960年代に入ると、世界各地における活動の活性化を目指して、世界五地域(アフリカ、アジア・太平洋、ヨーロッパ、ラテンアメリカ、北米・カリブ海)を設定し、世界総裁の下に地域担当副総裁(OMEP世界総会で各地域一人選ばれ、地域における議長を務める、任期は3年)をおくこととなった。地域担当副総裁のリーダーシップのもとに、各地域における会合やセミナー等を開催する改革が促進された。

日本におけるOMEPの活動は、1962年の第9回ロンドン大会へのオブザーバー参加から始まる。1966年にはOMEP日本準備委員会を発足させ、この年の第11回パリ大会では加盟準備国として承認、続く第12回ワシントン大会(1968)でついに日本の正式加盟が決定したのである。加盟後、OMEP世界理事会および世界大会へ参加し、OMEP日本委員会は「世界の子もたちや幼児教育の今」を知るための活動を積極的に展開してきた。

その後、1970年には環太平洋地域加盟国の幼児教育・保育関係者が東京に集い、OMEPオーストラリア・極東・太平洋地域会議が開催された。

1990年には世界本部から日本での世界大会開催の要請を受け、1991年には準備委員会が発足、1992年の世界理事会で正式に第21回OMEP世界大会の日本開催が決定した。1993年より世界大会運営委員会が具体的な準備を開始し、ついに1995年アジア地域初のOMEP世界大会が横浜で執り行われた(世界常任理事会・世界理事会は東京)。44か国、1国際機関から約2000人の参加を得て成功裏に終了し、日本委員会の発展期を象徴する大会といえる。

2011年には、アジア・太平洋地域大会が予定され準備作業が進んでいたが、3月に未曾有の大震災に見舞われた日本での開催は中止となった。

そして、2019年京都で開催されたOMEPアジア・太平洋地域大会(APRC, テーマ「幼児教育・保育の質」)には、アジア・太平洋地域やそれ以外にも14の国や地域から400人を超える参加があった^{xii}。

2. OMEP APRC 2019における研究動向

「幼児教育・保育の質」をテーマに掲げるこの大会では、①SDG4.2、②子どもの権利、③ESDの多様性、④遊び、⑤専門職養成、の5つのカテゴリに分かれて

研究発表が行われた^{xiii}。

表1 OMEP APRC 2019 in KYOTOにおける研究発表

カテゴリ	口頭		ポスター	
	件数	発表者の国・地域	件数	発表者の国・地域
SDG4.2	6	フィリピン, 中国, タイ, クロアチア	11	日本
子どもの権利	5	台湾, クロアチア, ニュージーランド, 日本	10	日本, 中国, タイ, ミャンマー
ESDの多様性			12	日本
遊び	12	シンガポール, 中国, オーストラリア, ベトナム, 日本, 台湾, 香港	21	日本
専門職養成	17	シンガポール, 中国, 日本, 香港, オーストラリア, フィリピン, 台湾, ニュージーランド	37	日本, 台湾, タイ, 韓国
計	40		91	

口頭発表, ポスター発表ともに専門職養成のカテゴリが一番多く発表者の国・地域も多様である。

「SDGs4.2」カテゴリでは, 国の子育て・幼児教育政策を反映した制度・計画などを検討した各国からの発表や幼児を取り巻く自然・人的環境に焦点を当てた発表が見られた。

「子どもの権利」カテゴリでは, 子どもの権利に関する理論的, 実践的アプローチが様々な角度からなされ, このカテゴリで福島の子どもたちの状況(「自然剥奪症候群」)について発表がなされた。

「ESDの多様性」カテゴリでは, 概念検討を行った研究やESDの様々な実践研究(放射能下の福島, アイヌ文化, 蚕, 外国につながる子どもなどをテーマに)の発表が見られた。

「遊び」カテゴリでは, 遊びを通して子どものウェルビーイングを目指した各国の取り組みが発表された。自然環境(虫, 土など)での遊びに関するもの他, AIやロボットとの対話についての研究発表も見られた。

「専門職養成」カテゴリでは, 専門的力量的の検討とその育成について各国から理論的および実践的研究が寄せられた。保護者の役割を重視する研究も見られ, 異年齢間や多文化間における保育者の役割, 社会資源(美術館・博物館)の活用など多様なアプローチから研究発表がなされた。

3. OMEP APRC 2019における福山市立大学からの研究発表

3-1-1 研究発表(弘田)の概要

OMEP・APRCにおいて, 弘田は「The idea of nature in today's early childhood education from the research based on the observation and participation

into Japanese kindergarten (日本の幼稚園の観察と参与に基づいた研究から見る今日の幼児教育における自然概念)」というタイトルでポスター発表を行った。この研究は, 筆者がこの6年間観察を続けている大阪市内の私立幼稚園の実践を日本特有の教育システムとして捉えなおそうとする試みであった。その特有さを定位するものとして, 「自然」という概念を選んだ。この自然とは, 西洋近代において言われる物理的世界における自然物や現象の総体ではなく, 東アジア圏において醸成され, 特に日本の江戸時代において形作られ, 今日まで一部で引き継がれている概念を指す。

このような形で, 国際学会という舞台で, あえて日本的な自然を西洋近代の自然に対置させながら提示することには一つの目論見があった。それは, 典型的に西洋近代と対置される日本の自然概念を思想的に検討した上で, 日本の幼児教育を歴史的なスパンから見ることによって, 他の学会参加者と対話するという目論見である。今回, この試みは内容的にもまたポスター発表という限られた空間・時間においても, 成功したとは言い難いのだが, その目論見を晒しながら, この国際学会での弘田のポスター発表の内容を概観してみたいと思う。

大阪のある幼稚園では, この40年ほど続くカリキュラムに基づき, 午前中の日課活動を行っている。ここでは様々な器具を用いた体育ローテーションや, 言葉やカードなどを素材にした言葉遊び, ピアノや楽器などを使った音楽遊びが1時間半にわたって行われている。3歳~5歳のクラスの子どもたちは熱心にその活動に参加する。日本の教育史家である辻本雅史は, その幼稚園の実践に江戸の教育につながる学びの源流があるのではないかと指摘する^{xiv}。子どもたちは体育において他の子どもの後を追っかけ, 一つの流れになって運動する。また言葉や音楽の遊びには先生の出す声や音に従って, それに一体化させようと自分の声や音を発する。辻本はさらに, ここには「学び=まねぶ」という古義が隠されているのだと言う^{xv}。

日米の教育を比較した東洋は, 西洋型の一つ一つのプロセスを丁寧^{あずまひろし}に言葉で教える教育=instructionに対して, 日本の教育は, 言葉で教えるのではなく教育者と子どもが一緒になって活動し, 必要なことを少しずつ吸収させるしみ込み型=osmosisの教育だと定式化した^{xvi}。この幼稚園の教育では, このような日本の古

典型的な「まねぶ」教育、そして「滲み込み型」の教育が意識されており、その実践は全国の200園以上の幼稚園・保育所・認定こども園に及ぶものとなっている。

またこの園は、仏教の寺院の境内にそもそも設置された幼稚園である。言葉遊びは、いわば仏教の儀式のような趣がある。子どもたちはお経のように教師の言葉を反復する。このような儀礼の中で、歴史的人類学者Ch. ヴルフが言うように、他の参加者の言葉と自分の言葉が響きあう「ミメシス」のような現象が引き起こされるのだという。ミメシスとは、同じ動作や言葉などを儀礼参加者が共有し反復することであり、それによってもたらされるつながりは、社会心理学者M. チクセントミハイが言うような人々の時間感覚を変えるフロー体験のようなものであるとヴルフによって説明されている^{xvii}。

このような体験とは、いわゆる我を忘れるような体験である。我をなくして、周囲の人々や活動、対象の中に入り込んでいく。京都学派の哲学者・西田幾多郎は、日本文化の特徴を次のように論じているが、それは筆者が調査している幼児教育の実践と重なってくるように思われる。

「私は日本文化の特色と云うのは、主体から環境へと云う方向に於て、何處までも自己自身を否定して物となる、物となって見、物となって行くと云うにあるのではないかと思ふ。己を空うして物を見る、自己が物の中に没する、無心とか自然法爾とか云うことが、我々日本人の強い憧憬の境地であると思ふ。」^{xviii}

私が調査している幼児教育の現場では、我を忘れて活動に入り込むことを促すカリキュラムが実践されていた。このようなカリキュラムは、周囲の子どもや教師たちと同じ動作や声を出す一種の儀式的な営みである。そこでは参加者のエネルギーがフローするような体験が見出される。それを哲学者・西田の言う「自己が物の中に没する、無心とか自然法爾」といった体験とつなげて考えることは可能なのではないか。というのが荒い説明であるが、私のポスター発表における日本の幼児教育におけるある自然概念の概要である。

3-1-2 参加者とのやり取りから

このように幼稚園活動から日本の文化的特質にまで展開する論を発表した。1時間の中に、数名の聴講者が来てくれたが、そのうちの数名は、「この幼稚園実

践には自然が存在しているのか」という問いかけをしてくれた。その質問はもっともなものである。タイトルには日本の自然概念と入っているのだから。西田の日本文化論では、自己が物の中に没することが自然だと論じられる。だが、その日本文化における自然は、英語におけるnatureに対応するものではない。中世からの日本文化における自然とは、しばしば「じねん」とルビを振られるようなものであり、natureの訳語である「しぜん」とはギャップのある概念であることはよく知られている^{xix}。

今回のようなアジア・太平洋地域の国際学会という舞台において様々な国からの参加者が英語という非母国語でわかりあうことを目的に話が交わされる。だが、安易に「わかる」ということは、実はそれ以上の深さを求めないことを意味する。私自身がこれまでヨーロッパで幼児教育、教育史の学会で発表したことはあったが、改めて、安易にわかるものを提示するのではなく、限られた時間の中でも話の中で一緒に考える姿勢を持つことの大切さを思い知らされた。そのためのnatureとイコールにならない「自然」概念を持ち出した意義は一定あったと考えている。

3-2-1 研究発表（春木・森）の概要

春木・森のポスター発表のテーマは、「Research on the quality of early childhood education: Based on the examination of transition curriculum between preschool and elementary school education (質の高い幼児教育とは—接続期カリキュラムに関する調査をもとに—)」である。

目的は、幼児教育施設の違いを問わず、すべての子どもが初等教育を受ける準備が整うようにするための、質の高い幼児教育について検討することである。

方法として、A市内の公立小学校及び幼稚園の長や教員を対象としたアンケート調査とインタビュー調査を実施した。なお、本調査は、福山市立大学研究倫理審査委員会の承認を得ており（番号：2019008）、A市教育委員会のご協力を得たものである。

アンケート調査について、設問Ⅰでは、年長クラス数、1年生クラス数、人数を基礎的な情報として収集した。設問Ⅱでは、接続期カリキュラムの設定及び実施の開始年度、設問Ⅲでは接続期カリキュラムの名称を問うた。設問Ⅳ、Ⅴでは接続期カリキュラム設定及

び実践上の成果と課題（児童・保護者・教員の様子等）、設問Ⅵでは就学前教育に身につけてほしい「ことば」に関する力、設問Ⅶでは接続期カリキュラムについての気づきや考えについて記述回答を求めた。

インタビュー調査は、アンケート調査の回答をもとに、各設問についてさらに詳細に問う形をとった。

本稿では、上記の研究目的に焦点化するため、特に、設問Ⅱ、Ⅳ、Ⅴについて検討する。

アンケート調査の結果から、接続期カリキュラムの設定上の課題として、幼稚園、小学校ともに「幼小間の連携」が課題として挙げられた。具体的には、「児童数（入学者数）も多く、連携対象の園所等も多いため教員間や子ども間の連携が難しい」、「園内で話し合いはしやすいが、小学校側からの意見や考えなど、互いの意見交流をしながら作っていく場や時間の確保が難しい」、「学区内小学校は園から離れた場所にあるため、細やかな連携をとることが難しい」といった、子ども間や教員間の交流に関わる時間や場の不足、立地が原因と考えられていた。

また、接続期カリキュラムの実践上の課題として、幼稚園、小学校ともに「幼小間の連携」と「子どもの実態」、「活動時間の保障」が課題として多数挙げられた。特に、「幼小間の連携」の具体としては、「幼稚園側の思いと小学校側の思いの違いがある」、「学区小学校と離れているため、細やかな連携がとれない、幼児にとっても日頃から小学校の環境を目にすることができない」、「保育所、幼稚園での連絡を密にすることがなかなか難しく、保幼→小学校へのスムーズなつながりができていない」、「しっかり時間をかけて連携をとりたいが、なかなか時間がとれない」である。小学校では、さらに校内の連携や時数計算の煩雑さや困難さが挙げられた。つまり、実践上の課題としても、子ども間や意識の異なる教員間の交流に関わる時間や場の不足、立地が主な原因と考えられていた。

これらにインタビュー調査の結果をあわせて考察すると、A市においては幼小接続期カリキュラムの必要性が認識されつつあり、2020年度の全面実施に向けて気運が高まっていることが分かった。そして、子どもの行事や授業への参加には、幼小の距離や立地という解消の困難な課題があった。また、子どもの情報伝達や、教員の合同研修については、共通理解が難しいという課題が見出された。さらに、教員の研究保育や

授業への相互参加、交換保育・授業については、学区内に複数の幼児教育施設がある場合や、学校事情によっては時間の捻出が困難な場合があることが分かった。

以上より、「接続期カリキュラム」が子ども間の交流や、教員による子どもの情報交換、教員間の相互理解を中心とした幼小連携としてとらえられていることが推測される。こういった連携においては各学校園による取組みに格差が生じやすく、保育の質が保障されづらいといえる。また、円滑な幼小接続のためには、将来的な成長を見据えてカリキュラムを編成することが必要である。そのためには、幼児期から児童期へと、子どもの発達段階に基づいて能力を伸長するという視点が不可欠である。

よって、今後、本調査で明らかになった個別的要因を乗り越え、保育の質を高めていくためには、カリキュラムベースで接続期教育を構想することが必要である。具体的には、幼児教育における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や5領域と小学校の教科教育とを、子ども理解に基づいて、子どもの発達段階に鑑みながらなだらかに接続することである。今後、具体的な幼小接続期カリキュラムについて提案したい。

3-2-2 参加者とのやりとりから

ポスター発表を受けての質疑では、複数の保育者や研究者から貴重なご意見をいただいた。

特に、実践研究の豊富な保育者から「小学校に入る前に少しでも慣れさせてあげたい」、「小学校に入ってから困らないようにしてあげたい」という強い思いが訴えられた。対話の内容から、幼小の段差について自覚的であり、それをうまく乗り越えられるようにするための方法として交流や情報交換中心の連携を実施していることが分かった。この場合の段差としては、校舎や教室等の環境の変化、初対面の集団等が想定されている。そのため、小学校の環境に慣れ、上級生と知り合うための交流を中心とした幼小連携が実施されていると考えられる。

接続期カリキュラムについては、政策動向に伴い、各領域における研究、各学校園での設定及び実践が進められている。しかし、それらの実践の多くは交流や情報交換にとどまる（表2「ステップA」）傾向にある。今回のA市における調査やポスター発表時の対話についても、同様の結果であった。

表2 連携・接続の体制

ステップ	A	年数回の授業, 行事, 研究会などの交流があるが, 接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
	B	授業, 行事, 研究会などの交流がし, 接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
	C	接続を見通して編成・実施された教育課程について, 実践結果を踏まえ, さらによりよいものとなるよう検討が行われている。

文部科学省初等中等教育局教育課程課・
幼児教育課 (2019) p.5 をもとに稿者作成

こういった実態に対して, まず, 各学校園におけるステップBの実現可能性を高めることが重要である。そのためには, 接続期カリキュラムの具体を提案することが急務である。そして, その過程では, 保育者の抱く, 「慣れさせたい」, 「困らないようにしたい」という, 子ども理解から生じる切なる願いを実現するような工夫が必要であることが示唆された。

また, 保育者に向けて, カリキュラムベースの幼小接続期教育について, 実効性の高い形で円滑な接続を実現し得る方法として示すことの困難さと重要性を再確認することができた。

3-3-1 研究発表 (大庭) の概要

大庭は, 「Teacher's training with teaching material for ESD made by the bottom of PET plastic bottle (ペットボトルを再利用したESD教材を活用する保育者養成)」というテーマでポスター発表を行った。

2015年国連サミットで採択されたSDGs (持続可能な開発目標) のうち, OMEPは特に4.2 (2030年までに, 全ての子どもが男女の区別なく, 質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより, 初等教育を受ける準備が整うようにする) と4.7 (2030年までに, 持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル, 人権, 男女の平等, 平和及び非暴力的文化の推進, グローバル・シチズンシップ, 文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して, 全ての学習者が, 持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする) を重要視し, 幼児期に関わる保育者・家族などへの有用な知識や方法の共有と浸透を目指してESD World Project^{xx}を展開している。

OMEPはUNESCOのESDグローバルアクションプログラムのキーパートナーとして, 実践におけるESD, ESDのための国際的対話, 保育者・教員養成や教材の開発などに取り組んできた^{xxi}。

本研究は, OMEPが提示したESD実践枠組みを援用して, 福山市立大学における保育者養成科目で用いられるペットボトルを再利用した教材の意義と活用について検討したものである。

福山市の伝統的な踊り「二上りおどり」で用いられる「四つ竹」をヒントにし, ペットボトルの底を加工して開発したカスタネット様の鳴り物とそれを用いたリズム遊びは, 2005年に開発して以来, 手指操作及び全身の運動発達・聴覚・触覚等の感覚刺激・他者との関係性などを促進し, 幼児期の総合的な発達に寄与する教材として広く保育・福祉現場で用いられてきた。

OMEPが提示したESD実践枠組み (2010～) では, Reuse, Reduce, Recycle, Redistribute, Respect, Reflect, Rethinkの7項目が挙げられている^{xxii}。ペットボトルの再利用と工作を通して, 教材の素材 (物質的, 社会的) と幼児期の発達を理解しようとする単元を検討すると, 次のようにまとめることができた。

表3 ペットボトルから作るカスタネット (ESD教材) を用いた活動と7つのR

Reuse	: ペットボトルを 再利用 して工作
Reduce	: ごみを 削減
Recycle	: ペットボトルの底をカスタネットに リサイクル
Redistribute	: 教材として幼児教育・保育現場に 再分配
Respect	: 伝統文化の 尊重 (伝統的な二上りおどりの鳴り物から着想)
Reflect	: 幼児期の心身発達を 十分に考慮 したプロセス
Rethink	: 活動を通して幼児期の発達の個性と保育者の育ちを 再考

次に, 保育者養成の観点から, OMEPではESD World Projectの中で, 子どもの声に耳を傾け, ESDをさらに広めリーダーとなる「保育者」の育成が議論された^{xxiii} (2014年～)。研究発表では, この教材を用いて, 子どもとの関係性を直接体験する前段階として合同授業で行われているクロスカリキュラム (異学年の学生間の教え合い) について整理した。ペットボトルを再利用した教材作りを既に経験してきた2年生が新入学の1年生に対し, 工作の準備・運営・教材を活用した遊びの展開までを協同的に行うことで, 教材理解と参加を促す関わり方についての理解の両方が深

まっていることが、両学年とも授業の振り返りから読み取れる。

このESD教材の活用法（工作から表現まで）は、現職教員対象の教員免許状更新講習でも扱われ、この教材を通して、異校種の教員が協同的に子どもの発達の連続性と表現を学ぶ機会となっている。

3-3-2 参加者とのやり取りから

保育者養成における福山市独自の実践を提示した発表には、国内外の参加者が多く集まり、質疑応答が活発に行われた。片付けの時には、発表時間中他の業務に従事していた学生たちが、「気になっていたので、質問していいですか?」と集まってきた。幼児期の発達ニーズや環境への配慮、他者との関係性を体験的に理解できる教材として、また様々な地域・場面でESD実践の展開を可能にするものとして、自分が使う場面を色々想定しながら、学び取ろうとしていた。

自国での紹介や代用可能性の模索、自園の保育計画における活用、保育者養成や現職研修における応用などに関する様々な意見が聞かれ、用意していた教材サンプルはすべて提供することとなった。どのような活用方法で実践しているのか、追跡調査を行いESD教材としての普遍性と地域性を検討する必要性についても、今後の課題として認識することができた。

4. 考察

OMEP APRCでは、乳幼児期の子どもを取り巻く現代的な課題について、アジア・太平洋地域を中心に様々な国から多様な観点で研究発表が行われた。

弘田研究は、「日本的な自然を西洋近代の自然に対置させながら提示する」という、「ESDの多様性」カテゴリにふさわしい問題提起となった。育つ文化背景を丁寧に検討することは、その後の人格形成の基盤が形成される乳幼児期にこそ必要な視点であるといえる。OMEPは、世界中の子どもたちのために異なる価値観や技能を分かち合うために設立され、各国から集まる世界大会や地域大会はまさに国境を越えた学び合いの場となっている。弘田研究は保育現場での観察から日本的な「自然」概念を検討する内容である。日本文化の特色を背景とした概念を示したものとして位置づけられ、国内外の参加者が幼児教育場面における「自然」について考える契機となった。

弘田研究が幼児教育の概念に焦点を当てたものである一方、OMEP設立の理念のうち重要視されるもう一つの局面、「幼児の発達ニーズに応える実践に資する情報の共有」に力点を置いたものが大庭研究である。幼児を取り巻く世界的潮流の中で、「Sustainable（持続可能）」という概念においては、自然環境だけでなく人的資源としての子ども・家庭・保育者自身の開発、およびそれらを巻き込んだ社会的活動が求められている。

幼児期の発達ニーズに体験的に応えようとする実践的な内容に焦点を当て、ESD World ProjectにおけるESDの「7R」や保育者教育の視点を検討枠組みとして分析を行った。ペットボトルの工作と成果物が作り出す楽しい音をもたらす心身発達へのアプローチ（手指操作、全身運動、リズム、感覚刺激等）については、参加者から使いこなすための熱心な質問が寄せられ質疑応答は白熱した。

春木・森の共同研究は、SDG4.2「全ての子供が男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする」に焦点を当て、詳細な聞き取りから接続期の諸課題を明らかにした。OECDのStarting Strong V (2017)「Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education（幼児教育・保育から初等教育への接続）」でまとめられた四つの政策提言の筆頭にも、「子どもに学校への準備をさせるのではなく、学校が子どもへの（受け入れる）準備を整えることへの焦点化」が挙げられている^{xxiv}。接続期の課題については、今後も地域特性と国際的な潮流の両方を視野に入れながら注視していく必要がある。

おわりに

今回、福山市立大学から教育哲学、言語教育、表現教育を専門とする研究者が、OMEP APRC 2019に参加し国内外の幼児教育・保育研究者や実践者とそれぞれの研究を通して意見交換を行った。世界的な潮流の中で各国から寄せられた研究を討議する国際大会であることを踏まえ、OMEP APRC 2019における発表を通して幼児教育・保育研究を進めていく切り口について今回改めて分析・整理することは、実に有意義であり本学の有する人的資源の豊かさを実感する作業であ

った。

教育学部は様々な専門分野の教員が集まっており、これまで互いの研究について十分に関わる余裕がなかったかもしれない。しかし、今回幼児教育・保育を対象とする国際大会で、個々の研究の位置づけがより明確になり、複眼的な視野で今後の研究課題を見つけることができた。

国際大会であったからこそ、英語でより客観的に自己の研究を確認することができ、それを参加した者同士で相互に再検討することがいかにさらなる研究の進展に資するのか、学ぶことが多かった。

今後もこうした機会を逃さず、幼児教育・保育の新たな地平を切り開くためにも、研究者間の協同的な試みを模索していきたい。

注

- i OECD (2006), *Starting StrongII: Early Childhood Education and Care*
OECD編著, 星美和子他訳 (2011)『OECD保育白書—人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較』, 明石書店
- ii OECD (2011), *Starting StrongIII - A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care*
OECD編著, 秋田喜代美他訳 (2019)『OECD保育の質向上白書：人生の始まりこそ力強く：ECECのツールボックス』, 明石書店
- iii OECD (2015), *Starting StrongIV, Monitoring Quality in Early Childhood Education and Care*
- iv OECD (2017), *Starting Strong V Transitions from Early Childhood Education and Care to Primary Education*
- v OECD (2017), *Starting Strong 2017, Key OECD Indicators on Early Childhood Education and Care*
- vi OECD (2018), *Engaging Young Children, Lessons from Research about Quality in Early Childhood Education and Care*
- vii 文部科学省ESDについて
<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
(最終閲覧日2019年10月1日)
- viii 外務省「持続可能な開発目標」(SDGs)について
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/about_sdgs_summary.pdf (最終閲覧日2019年10月6日)

- ix History of OMEP
http://www.worldomep.org/index.php?hCode=INTRO_01_01_01 (最終閲覧日2019年9月23日)
- x OMEP創設時の歴史的経緯についてはOMEPアーカイブで提供される資料を参照した。
History Book (French) 1948-1958,
40th Anniversary History Book (English) 1948-1988,
http://www.worldomep.org/index.php?hCode=INTRO_01_05_01
(最終閲覧日2019年8月30日)
- xi OMEP日本委員会 (2012), 『我が国の幼児教育・保育と国際交流—OMEP日本委員会40年の軌跡—』
- xii OMEP-APR in KYOTO 2019 CONFERENCE PROGRAM&PROCEEDING
- xiii 同上, pp. 40-51
- xiv 辻本雅史 (2006) 『しつけの温故知新—江戸時代の幼児教育に学ぶ』創教出版
- xv 辻本雅史 (1999) 『「学び」の復権—模倣と習熟—』角川書店
- xvi 東洋 (1994) 『日本人のしつけと教育 発達の日米比較に基づいて』東京大学出版会
- xvii Ch. ヴルフ, 藤川信夫, 佐原守訳「The Creation of Body Knowledge in Mimetic and Ritual Processes ミメシスと儀礼のプロセスにおける身体知の創造」藤川信夫編 (2017) 『人生の調律師たち—動的ドラマトゥルギーの展開』春風社, p. 65
- xviii 西田幾多郎 (1968) 『西田幾多郎全集』第12巻, 岩波書店, p. 346
- xix 伊藤俊太郎 (1998) 「自然 4. 日本」の項目『岩波哲学・思想事典』岩波書店, pp. 639-640
- xx OMEP World Project
http://www.worldomep.org/index.php?hCode=ACTION_04_01_01
(最終閲覧日2019年10月19日)
- xxi OMEP (2016), Children in a Sustainable Society, ESD Brochure (English), p.7
ESDはGCED (Global Citizenship Education) とともにターゲット4.7を目指すことと示されている。
- xxii 同上, p. 3
- xxiii OMEPによるESD World Projectは2010年に始まり、2012年にはチェックリスト策定、2014年にはESDを推進する「保育者」の育成(保育者養成)が目指された。

富田久枝他（2018）『持続可能な社会を作る日本の保育乳幼児期におけるESD』, かもがわ出版, pp. 15-16

日本保育学会第69回大会（2016年, 東京学芸大学）においても自主シンポジウム「乳幼児期のESDの実践と保育者の意識」が行われ, ESDを実践に活かす保育者の養成が議論された。

xxiv 前掲iv, p. 16

（2019年10月23日受稿, 2019年11月26日受理）

Report of Research Presentations about Early Childhood Education and Care in OMEP (Organisation Mondiale pour l' Education Préscolaire) Asia Pacific Regional Conference(APRC) 2019 in Kyoto

OBA Mie ⁽¹⁾, HIROTA Yosuke ⁽¹⁾, HARUKI Yu ⁽¹⁾ and MORI Michiyo ⁽¹⁾

This paper examined three presentations about ECEC (early childhood education and care) from Fukuyama City University in OMEP Asia Pacific Regional Conference (APRC) 2019 in Kyoto. They are 'The idea of nature in today's early childhood education', 'The examination of transition curriculum between preschool and elementary school' and 'Teacher's training with teaching material for ESD'. OMEP is international organization founded in 1948 to promote the study and education of young children in all countries and so foster happy childhood and home life and thereby contribute to world peace. Differences of nationality, creed and culture could enrich in terms of sharing knowledge and exchanging ideas concerned with the educational needs of children. By discovering different cultures, considering structural roadblocks mentioned by OECD between ECEC and primary school, and improving the teacher education for ESD, three studies contribute suggestions to today's global issues.

Keywords : OMEP, Asia Pacific Regional Conference (APRC), nature, transition from early childhood education and care to primary school, Education for Sustainable Development

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University